

KFC 帰国者新長田交流会

通信 2号

編集発行：(特非) 神戸定住外国人支援センター

〒653-0038 神戸市長田区若松町 4-4-10-502

TEL078-612-2402

FAX078-612-3052 <http://www.social-b.net/kfc>

発行日：2013年2月28日

KFC 三年感受

神戸 KFC 理事長为中国归国永住者，开设了日语学习教室。

每周二上午 11:30~12:30 日语学习，12:30~13:30 午休，13:30~15:30 下午活动。

第一，第三周是中国地方特色的秧歌舞，第二，第四周是健身太极拳。

自由活动的项目有乒乓球，中国象棋，扑克等。

理事长还委托呼和德力根和奥两位，负责我们的活动。两位经常和我们共同商谈，努力尽量给大家组织更多的活动。让大家好好学习，多参加娱乐活动，多参加锻炼身体。

目前来讲，这样多样化的日语教室还是独一无二的。通过 KFC 日语教室的活动，能让我们更加了解日本的文化和历史。

理事长还在百忙之中，带我们去旅游京都，参观日本酿酒工序，去广岛参观原子爆发纪念馆，在纪念馆看实情照片后，令人发冷，不幸的百姓，惨死，灭绝人性的美国罪恶，回想起战争的可怕，望世界永远和平，不再发生战争。



KFC で三年経ちました。

KFC 理事長は、中国からの帰国者たちのために日本語教室を設立してしてくれました。

毎週火曜日、11時半~12時半は日本語学習で、12時半~13時半はお昼休憩、13時半~15時半は午後の活動です。

第一・第三週は、中国東北地方の秧歌踊りで、第二・第四週は、太極拳をしています。

他に卓球、中国の将棋、トランプも自由にやっています。

理事長は呼和さんと奥さんに運営を任せており、二人は常に私たちと相談しながら、活動を企画します。活動を通して、多く学び、色々な娯楽を楽しみ、身体を鍛えるように工夫します。

現在、このような日本語教室は他にありません。KFC日本語教室のプログラムを通して日本の文化と歴史についてもより理解を深められるようになりました。

理事長は多忙の中、京都の名所や日本酒工場、広島平和記念館など見学に連れて行ってくれました。平和記念館では、戦争の怖さとたくさんの罪のない市民が犠牲になったこと、非人間的な米国の罪を感じ、戦争の無残さを思い起こし、改めて世界平和と二度と戦争がないことを祈る機会となりました。

(松永桂子 一世)

中国残留邦人帰国者等が秧歌で神戸祭り初出演

2013年5月19日（雨）の第43回神戸祭りのステージ行事（花舞台）に中国残留邦人帰国者等が秧歌踊りで出演することが出来ました。

今年の神戸祭りは雨で帰国者の皆様は出演できるかどうか心配で前日から私の電話に沢山問い合わせがありました。私は「出演が出来ると思います」と答えながら本当のところは年齢も高く持病も持っている方が多いことを考えとても心配でした。雨が降れば中国の地方レベルの行事は中止するなど習慣の違いがあると思いますが、私はどうしてもこの機会を逃がしたくなかったとの気持ちの方で「出演が出来ると思います」といったのが本音のところかもしれないです。

KFCが3年前の高齢者調査をきっかけに始めた余暇の楽しみをテーマとした「KFC帰国者新長田交流会」を2年近く行って来ました。交流会では、「地域に溶け込むように」という建前の華やかな国策により、いろんな地域に分散居住させられ、孤独と孤立に追い込まれた中国残留邦人帰国者の方々に、自由に自己表現ができる場を提供することに勤めています。この自己表現にとって今回の出演は大きな役割があると私は考えていました。

秧歌踊りは帰国者の方々が養父母の地元でなじんだものです。それは中国と日本の戦争と中国人養父母という特別な歴史背景の中で身につけた文化です。日本に帰ってきた後、多くの帰国者の皆さんが日本人であるという高い自尊心の元で、日本語を始め、日本の習慣・文化・ルールなどを一所懸命学び直してきました。但し、自分たちが幼い時から40年も50年も生活をして来て身に染み付けた中国文化に対して複雑な感情を持っているように私には感じられます。中国にいたときは「小日本」といわれ日本に帰ってきたら「中国に帰れ」と理解しがたい現実の中に生きている彼らのことを考えればわからないこともないです。今日の日本は「多文化共生」が行政用語として定着していますが、現実のところの「本当の多文化共生」というのは難しいです。日本語以外の言葉を近いところで大勢な人々がざわざわと話されるとイライラしない方の割合は日本の中でどのぐらいでしょうか。昨日、一般の日本の貿易会社に就職している私の友人に携帯で電話をかけたところ、私の中国語で聞く質問に対して彼は綺麗な日本語で答えてきます。これが私には改めて、日本に生きていく為に堂々と母語を話すことは極めて難しいことと考えさせられました。実際帰国者の中には私と一所懸命日本語で話す方々もいます。さらに、中国では社会的な役割もあって多くの方々を纏めてきたが、日本に帰国してから家に引きこもってしまっている帰国者の方もいます。だからこそ今回の出演は彼らが多くの方々に理解と交流を求める場となるのではないかと思いました。確かにこれだけじゃ足りませんが、私たちとして出来ることから始め、自信を持って自己表現していけたらと思います。

最後に参加して帰国者たちの感想を見ながら、来年度の神戸祭り（出来ればパレードに）に参加できることを祈りましょう。

劉桂麗（一世）「天気は雨だったが寒くもなかった。花舞台で秧歌踊りを踊った。衣装を着て太鼓や扇を振りながら中国吉林省の故郷の踊りを踊れてうれしいし、気持ちいいし、良かったです。」
高坂麗華（二世）「神戸祭りの天気は雨でした。しかしみんなと一緒に踊り楽しかった。面白かった。」
姜成厚（一世）「うまく演奏できた。みんなが見ていて気持ちよかった。雨だった。うれしかった。気持ち良かった。」

（呼和徳力根）

大秧歌魅力，伴随着老年的人生

我们这些来自中国的残留邦人，过去大部分都生活在东北地区，长期以来大秧歌就成了人们的娱乐生活之一，每到节假日，庆典之日，大家都要扭扭大秧歌，增添生活的乐趣。由于大秧歌的舞姿优美，欢快，易学，老少皆宜，是大家喜闻乐见的娱乐节目。

现代健康含义并不仅是传统所指身体没有病而已，而是指一个人生理上，心理上和社会交往上的完好状态。残留邦人一世，二世到日本，由于生活的改变，语言不通生活压力比较大，根本没有办法和社会交往，大家的生活很简单，很压抑，正在这个时候 KFC，为我们这些归国者提供了人力，物力及师资，场地，各方面的有力条件，组织我们学习日语，学习太极拳，进行各种娱乐活动，同时组建了秧歌队，设专人负责，配备秧歌服装，买了锣鼓，钹等让我们最喜爱的大秧歌舞动起来了，使我们这些以步入老年时光的人们，老有所学，秧歌队成员平均年龄都在 65 多数周岁以上，多数身体不好，但是大家都非常踊跃参加，专心学习各种秧歌的动作，经过一年来练习，大家扭秧歌的水平明显提高，而且还增添很多花样，积极参加各种社会活动。2013 年 6 月参加了“神戸祭り”庆祝表演，大家心里特别高兴，有人说，KFC 组织扭秧歌真好。扭起秧歌心里高兴，不管有什么愁事都能烟消云散，心里痛快，还有人说，自从扭秧歌以后腰腿病也好了。身体比过去健康了。我们这些残留邦人，每到一起活动，心情就特别舒畅。

我们这些步入老年时光的人们，每天能愉快的生活，以及积极向上的精神，满腔热情舞出我们心声。以无比绚丽的夺目光辉，向人们展示着人生的壮观，我们用大秧歌的独特表演方式舞出我们的欢快，豪放的心情，这就是大秧歌使我们生理上心理上和社会交往上，有一个完好的状态。秧歌无限好，欢乐度余生，这就是大秧歌的魅力。

衷心祝愿老年朋友，在新的一年里快乐，健康。

让我们在欢歌笑语中渡过每一天。

(秧歌踊りチーム リーダー 李賀(二世))

神戸新聞

第3種郵便物認可

交流拡大願い 大陸伝統の舞

踊り手は「興味持つ 大がく隊に参加して くれるよう、いい踊りを 披露したい」と話す。

同隊の出陣は花舞台 (神戸市中央区の東遊園 地特設ステージ)で、午 後7時45分ごろから15分 程度。同セタタ 8・G・I・2・2・6・0

「華やかな場で本格的に 踊りたい」と神戸まつり 出陣を目標に掲げ、昨年 4月に「神戸秧歌隊」を 結成し、交流会に合わせ て練習し始めた。

本書は「田舎風 踊り」をテーマとし、ビ ンゴ色の衣装を着た踊り手 が列をなす。太鼓やフ ルバルの音に合わせて 練習を繰り返しながら練 り歩く。中国・吉林省で 生まれ、1994年に帰 国した残留邦人、世の松 水佳さん(68)＝明石市

きょう神戸まつりで演技

踊り手は「興味持つ 大がく隊に参加して くれるよう、いい踊りを 披露したい」と話す。

同隊の出陣は花舞台 (神戸市中央区の東遊園 地特設ステージ)で、午 後7時45分ごろから15分 程度。同セタタ 8・G・I・2・2・6・0

「華やかな場で本格的に 踊りたい」と神戸まつり 出陣を目標に掲げ、昨年 4月に「神戸秧歌隊」を 結成し、交流会に合わせ て練習し始めた。

本書は「田舎風 踊り」をテーマとし、ビ ンゴ色の衣装を着た踊り手 が列をなす。太鼓やフ ルバルの音に合わせて 練習を繰り返しながら練 り歩く。中国・吉林省で 生まれ、1994年に帰 国した残留邦人、世の松 水佳さん(68)＝明石市

県内の中国残留邦人

中国残留邦人は戦前、N.O.法人「神戸定住 開拓会」として家族で 外国人労働者として神 戸開拓(中国東北部に 戸田長田)では約10 渡り、戦後の帰国取り 手は月々、地域にお びされた女性や子ど も、兵庫県社会福祉 連「残留邦人」に集ま った。残留邦人(配偶 者)対象生活援助付 金、昨年からは週1回 9人(3月末時点)いる 明石市から集まる約 10人が、私費で帰国し、子 どもの教育は母国に 委託されているとい っている。

40~70代の25人「興味持つ人増やしたい」

「華やかな場で本格的に 踊りたい」と神戸まつり 出陣を目標に掲げ、昨年 4月に「神戸秧歌隊」を 結成し、交流会に合わせ て練習し始めた。

本書は「田舎風 踊り」をテーマとし、ビ ンゴ色の衣装を着た踊り手 が列をなす。太鼓やフ ルバルの音に合わせて 練習を繰り返しながら練 り歩く。中国・吉林省で 生まれ、1994年に帰 国した残留邦人、世の松 水佳さん(68)＝明石市



2013年5月19日神戸新聞

秧歌踊りの魅力は、第二の人生と共に・・・(前ページ翻訳)

KFC 帰国者交流会に参加している私たち中国から帰国した残留邦人の多くは、かつて中国の東北地方で暮らしていたので、秧歌踊りは長年に渡り皆さんの娯楽の一つでした。祭り、お祝いの日には秧歌踊りをして盛り上がりました。秧歌踊りは、踊る姿が綺麗で、リズムが楽しく、簡単に身に付けることができることから、子どもからお年寄りの方までみんなで楽しむ娯楽でした。

現代においての健康という概念は、古くから言われている病気の無い健康な身体という点だけではなく、一人の人間としての生理的、心理的、社会的コミュニティの面においての良好な状態を指しています。

残留邦人の一世、二世は、日本に帰国し、生活の変化とことばのハンディから生活の圧力が大きく、普通の社会と正常な交流ができなく、生活リズムそのものも単純で、負担も大きかったです。ちょうどその時、KFC が私たち帰国者のために、人的、物質的及び教師の面、場所などのいろいろな面で良い環境を提供し、支援をしてくれました。また日本語の学習、太極拳練習などの機会とたくさんの娯楽活動も企画してくれました。同時に秧歌踊りのチームも作り、リーダーを決め、秧歌踊りの服装、太鼓、パーカッションなども用意してくれて、秧歌踊りがきちんとした形でスタートしました。老後生活に突入している私たちにまた学びの機会と場所を与えてくれました。秧歌踊りメンバーのほとんどの人は 65 歳以上なので、病を抱え健康状態はよくありませんが、皆さんは積極的に練習に参加し、秧歌踊りの動作を熱心に覚えました。一年あまりの練習を通して、皆さんの秧歌踊りのレベルはとて高くなり、いろいろなバリエーションも増えました。

2013 年 6 月には、神戸祭りで披露する機会を与えられ、皆さんはとても喜んでいました。

ある人は、「KFC の秧歌踊りの企画はとてもいい企画で、秧歌踊りはとても楽しいです。」と、ある人は、「秧歌踊りのお蔭で、腰痛と足の痛みがなくなり、元気になりました。」と言っています。帰国者の皆さんは、毎回皆で秧歌踊りをする時はとても楽しく、喜んでいきます。

老後生活を迎えている私たちは、毎日楽しく過ごし、いつも前向きで、情熱をもって自分の心の声を踊りで表現し、生き生きとした生き方そのものをもって私たちのたくましさ周りの人々にアピールしています。また秧歌踊りの独特の表現力で、私たちの愉快な、自由奔放な気持ちを表現しています。秧歌踊りは、私たちが生理的、心理的社会的コミュニティの面においての良好な状態を実現する一つの手段となりました。

秧歌踊りはとても楽しくて、私たちは秧歌踊りを通して楽しい第二の人生を送ることができると思います。これが秧歌踊りの魅力です。

お年寄りの皆さん、今年も楽しく、健康であることを祈っています。

また和気あいあい楽しい毎日であることを祈っています。

(翻訳：福田淑慧)



太極拳演武を発表しました！

太極拳有感

太極拳是中国文化的体育遗产之一。太極拳是一种武术，是一种艺术，疏松自然，能使身心保持健康的一种运动。

二十四式太極拳是比较简单又很普及运动项目，太極拳的动作很慢，很柔和，对于现代快节奏生活的人们，生活劳动很辛苦的人们，有慢性疾病的人都有是一个很好的运动项目。每天用很少的时间来作太極拳就能消除每天工作的紧张的状态是很有必要。

经常打太極拳对于老年人强身健体减少疾病都有一定的作用。因为老年人不能做激烈的运动，需要有静有动，静动相结合，所以太極拳是适应老年人的运动。每天坚持锻炼做好太極拳对于祛病，防病增强自身能力都有好处的。

劉 桂麗（一世）



日本語訳文：太極拳の感想

太極拳は中国文化の中の体育遺産の一つです。太極拳は武術の一種で、一種の芸術でもあります。その自由自在な動きは、心身とも健康にする運動です。

二十四式太極拳は、比較的簡単なので、広く普及されている運動項目でもあります。太極拳の特徴は、その動作がとても緩やかで、またとても柔らかなので、忙しい生活リズムの現代人にとって、仕事の忙しい人々にとって、また慢性病を抱えている人々にとってはとても良い運動です。毎日少しの時間を利用して太極拳をやることで、日頃の疲労と緊張感を解消できますが、それは人々にとってとても必要なことだと思います。

毎日継続的に太極拳をやることは、お年寄りにとっては身体を鍛え、強くし、病気にかからない身体作りのためにとても役に立つと思います。

お年寄りは、激しい運動ができないので、動の中に静がある静と動がうまく交合している太極拳は最も良いスポーツだと思います。

毎日太極拳を続けることは、病気を治し事前に病気を防ぐに非常に有効な運動だと思います。

（翻訳：福田淑慧）

帰国者日本語学習に参加して

昨年6月から新長田帰国者交流会の日本語教室の日本語コーディネーターに参加させてもらい8ヶ月になりました。この8ヶ月の間は、いろいろな試行錯誤を繰り返した時間でもありました。私にとっては、まず日本語学習における皆さんの状況、考え方、目標などの理解からのスタートでしたので、最初のころはかなり戸惑う時もありました。

その後、しばらく日本語学習支援を通して、徐々に交流会に参加している帰国者たちのいろいろなことが分かり、理解できるようになり、日本語学習支援の方向性も見えてきました。

そこで教材の選び、時間の設定など、他の支援者と相談しながら少しずつ改善してきました。支援の方法、内容など今後も更なる改善と工夫すべき課題はたくさんありますが、今後もその解決に向けて努めてまいりたいと思います。

昨年の6月から12月までの7カ月間は『“からだのしくみ”がよくわかる 人体ぬりえ』という教材を選び、中国語の訳文をつけて使用しました。皆さんの一番関心の高い病気のことの悩みの解決に少しでも役に立ててもらいたいと思いその教材を選びました。実際塗り絵を通して、からだのしくみと日本語と中国語の両方でその名称を覚えることで実際の生活に役に立ててもらおうことが目的でした。

また7月からは『学習記録簿』の記入を取り入れ、その記録を通していろいろなボランティア日本語教室で学んでいる帰国者の皆さんが、学習内容と方法を学習者自身で振り返り、また次の学習に役に立ててもらおうことを試みました。今後も定期的なまとめ、方法改善を繰り返しながら継続することで『学習記録簿』の記録を通して実現しようとする目標に少しずつ近付いてまいりたいと思います。

今年に入って1月からは、実際病院で使う会話、つまり医師、看護師と患者さんとの会話を内容とした教材（『医療（上） 新・日本の生活とことば-2』（中国訳文付き））を使用して、みなさんが病院などで実際経験する会話を中心に勉強を進めています。

帰国者たちの中には、「病院に行った時に医師、看護師との会話がとても困る」という声が一番多いです。その生の声を反映させ、その悩みを少しでも解決できる日本語の力を身につけてもらう日本語学習支援を目指して今後もいろいろな工夫と改善に努めてまいりたいと思います。

（日本語コーディネーター 福田 淑慧）



学習記録簿
(学習記録表)

氏名(姓) _____ 名前(姓名) _____

学習目標 (学習目的) 日本語を勉強したい。生活に役立ちます。

学習した日時、何を学習したか、どこで学習したかを記録しましょう。
(講座学習日時、学習内容、学習場所)

学習日時 (月・日・時)	学習内容 (学習課題)	学習場所 (自由記述欄) 日本人ボランティアの教室	教員名・指導員名 (自由記述欄) 日本人ボランティアの名前
6月18日	からだのしくみ	新長田交流会	福田 淑慧
6月20日	お風呂の作りかた	新長田交流会	福田 淑慧
6月21日	お風呂の日本語の勉強	新長田交流会	福田 淑慧
6月24日	お風呂の日本語の勉強	新長田交流会	福田 淑慧
6月25日	お風呂の日本語の勉強	新長田交流会	福田 淑慧
6月26日	お風呂の日本語の勉強	新長田交流会	福田 淑慧
6月27日	お風呂の日本語の勉強	新長田交流会	福田 淑慧

ピーナッツと野菜の和え物 (石垣深波絵)

材料： ピーナッツ (生) 250 g セロリ (アメリカミニ) 2～3 葉
 人参 (大) 1 / 2 本 八角 1 個 (大)
 干し山椒 10～15 粒 胡瓜 1 本

作り方：

- (一) ピーナッツ (生) を水に浸して一晩ねかせる。(水道水でもいい)
翌朝、ピーナッツを 2, 3 回洗って八角と山椒と一緒に鍋の中に入れる。
ピーナッツの 3～4 倍の量の水と小さじ 1 の塩を入れ火にかける。煮焦がさないように水を足し 40 分煮る。最後、水がなくなれば火を止め、そのまま冷ます。
- (二) セロリと人参を三角形に切る。鍋で湯を沸かし沸騰してからセロリと人参を入れる。歯ごたえのあるちょうどいい柔らかさまでゆでたら、冷水にとり、水を切って塩少々 (小匙 1) と混ぜる。
- (三) 胡瓜を洗い三角形に切る。塩少々をまぶしておく。(一) と (二) が十分冷めてから一緒に和える。最後に味見をして味をととのえて完成。

「中国帰国者二世から話を聞く」 —有馬久美子さんインタビュー—

(明石市中国残留邦人等支援給付支援・相談員)

(中国残留日本人兵庫県二世の会 副代表)

中国残留孤児をお父さんに持つ有馬久美子さん。19歳で帰国、現在44歳です。明石市の中国残留邦人等の支援・相談員としてご活躍です。優しいお人柄の中に道を切り開く強い力を感じています。お忙しい中インタビューの時間をとっていただきました。

———**単刀直入ですみません。まず帰国のお話を聞かせてもらえますか。**

はい。1988年10月13日、父母と妹2人と私で吉林省から帰国しました。父の身元は判明せず知り合いも一人もいませんでしたが、帰国のため北京に集まった時に同便で帰る帰国者の人たちと親しくなり、大きな心配や不安もなく日本に来ました。

———**お父さんが日本人だということは昔からご存じだったんでしょうか。**

父が残留日本人孤児だとはっきりしたのは、日中国交正常化以後、調査が本格化した後です。でも、それ以前に、日本人かもしれないとは感じていました。父には親戚がいなかったし、兄達が学校でからかわれていたからです。私も経験があります。小学校低学年の時、友達と喧嘩して「お前は日本人だ。」と面と向かって言われました。相当ショックを受けました。その後、喧嘩はしないように気をつけたんです。二度とそんなことばを聞きたくなかったですから。

———**帰国することにご家族は乗り気だったんでしょうか。**

まず訪日調査に父が行きました。身元は判明しませんでした。その後毎年のように日本政府から手紙が届くようになりました。帰国者向けの所沢センター(※1)の紹介、日本語学習の教材など。『日本に帰ってきてください。』という日本政府からのメッセージでした。

兄2人はすでに結婚していたので、行くなら家族5人で行くことになりました。父が日本の話をするたびに母は泣いて反対しました。その傍らで私は父の望郷の気持ちを感じていました。そのさびしそうな顔を見るのは辛かったです。日本に行けば、もしかしたら父の母親や肉親が見つかるかもしれないとも思いました。最終的には私が家族を説得し、5人で日本に行くことになりました。私は高校を卒業した年で、妹2人は中学生でした。

———**羽田空港からすぐ所沢のセンターに行かれたんですね。日本の最初の日々はどうでしたか。**

センターでは日本語や日本と中国の生活習慣の違いを学びました。寮も完備され、優しい先生方に囲まれて楽しい日が続きました。生活習慣のクラスで、「上から物を投げてはいけない」「迷惑となるような大きな声で話してはいけない」「平日はにんにくを食べてはいけない」と言われたことを覚えています。

私は父宛てに送られてきた教材で中国でも日本語を勉強していました。センターでは上級クラスでしたが、それでも4か月後にセンターを出るとき、全然自信はありませんでした。『郵便局はどこですか。』という話ができる程度のレベルだったかと思います。」

———**所沢センターを出てからすぐ明石に来**

られたんですか。

そうです。はっきりと覚えています。新幹線で西明石の駅を降りたのは夕方暗くなってからで、所沢と比べると寂しい所だと感じました。自立指導員と一緒に駅近くで夕食をとった後、バスに乗って新居へ行きました。

新居と言っても、古い団地の2階です。畳とふすまの部屋で窓の外は暗く、小さいトイレはセンターの寮とは大違いでした。部屋に用意されていたのは布団とガスコンロ、カーテンだけでした。既に夜だったので明日の朝ごはんはどうしようと思い、この時、日本に来て初めてとても心細くなり、家族5人一緒でしたが、言い表せない孤独と不安が襲ってきました。

「こんにちは。」「こんにちは。」近所の人と挨拶はしました。「、、、」「、、、」でもそれ以上の話はできませんでした。自分たちが外にいと、カーテンの隙間から見られているのを感じましたが、顔は出してくれませんでした。近所の人と関係を築けず疎外感が募りました。明石に来てすぐ知事の家に招かれたりして、公的には帰国者として歓迎されましたが、実生活では歓迎されていると実感することはありませんでした。そんな中、母は体調不良になり家から出たがらず、続いて父も体が悪くなりました。父は帰国時44歳で、センターでの学習では日本語も十分には身につかず、明るく前向きな性格だったのに人が変わってしまったかのようなようでした。

——生活習慣や文化が違っていたということでしょうか。ここで少し話題を変えて、お父さんのことをお聞かせ願えますか。

父は1歳半で養父に預けられました。養父のお姉さんの話ですが、父の両親は父親が軍人で母親が看護師だったが、ソ連に連

れて行かれたということです。その後の消息はわかりません。養父は父を預かったとき男一人所帯でしたが、お姉さんの手も借りて父を育ててくれました。父は高校卒業後仕事に就き、それからは父が養父の面倒を見てきました。養父は結婚歴があり、その妻や子どもとよりが戻ってからはその家族の面倒も父が見ていました。養父が亡くなったときの葬式も父が出しました。父は養子とはいえ、その家族とのつながりを強く求めていましたが、養父の実子との関係がうまくいかず、日本帰国後は関係が絶たれてしまいました。

父はずっと寂しかったのだと思います。母と結婚後ずっと家族を何よりも大切にしていました。中国では、父は職場でも家庭でも、自分の意見をしっかり持った、頼りになるリーダー的な存在でした。機転がきき、かしこい人でした。正義感が強く、おちゃめで家族思い、いつも楽しくて、声も大きいのでどこにいてもすぐ居場所がわかりました。

しかし帰国後は父でなくなってしまったようでした。家族の中で日本語が一番上手なのは私だったので、家族皆の手続きや連絡ごと、相談を全部引き受けていました。父は娘に頭を下げないといけなくなりました。日本語を習得することも出来ず、無力感、絶望感を感じていたようです。お正月に家族が集まって楽しく過ごす時に、毎年寂しそうに泣いていたのを覚えています。

妹2人は中学生なので進学のために貯金もしなければなりません。体が悪いにもかかわらずパン屋の仕事に就き明け方から働いていましたが、2回ほど倒れてしまいました。日本語も様々な制度もわからないので病院にも行かず、中国から持ってきた薬でしのいでいたようです。今、私は

支援・相談員(※2)の仕事をしていますが、その当時に支援策がもっと充実していれば、どんなに良かったかと思っています。

唯一、父は裁判(※3)で闘っているときと帰国者達の中にいるときは生き生きとして、中国で生活していた時の父の姿でした。兵庫県の帰国者の中心人物の一人でした。神戸地裁で勝訴し、平成20年4月から新しい支援策が実施されることになりました。しかし、その1か月半前の2月16日に亡くなりました。裁判で闘った後に得た権利を父は受けることができませんでした。無念だったと思います。

——ご活躍は一世の方からお聞きしています。支援策を受けられず本当に残念です。さて、家族の中で日本語が一番上手だったということですが、大変だったではありませんか。

はい。妹の授業参観、病院の付添、諸手続きなどすべて一手に引き受けていました。最初の1年間で体重が10キロ減りました。明石に来てすぐに職業訓練校に通って派遣の仕事に就きましたが、初めの2、3年間、笑った記憶がありません。それも職場の人に『声を出して笑ったほうがいいよ』と言われて気がついたんです。

——笑っていない有馬さんって、私には想像ができませんよ。

私たち家族は日本での生活を踏ん張ってきました。家族は家族であるがゆえに、本心を言えないときがあります。妹2人もおそらく慣れない日本の中学校で辛い思いをしていたでしょう。友だちもいないのか、いつも姉妹2人で過ごしていました。「つらい」とは口に出して言わないけれど、みんなが我慢しているのがわかりました。「日本になじまないと日本で生きていけない」ということをずっと自分に言い聞かせてきま

した。

両親は、中国に残っていた兄達のことが心配で一日でも早く家族全員で日本で暮らしたいという思いから、日本に帰国して2年後に兄達を日本に呼び寄せました。兄達は呼び寄せ家族であるため身元保証人探しや日本国籍就籍等の手続き、仕事や住宅のこと、兄達の子どもの幼稚園の手続きやストレスで一時的に耳が聞こえなくなった時の病院の付き添いなど、私が様々なことを手伝いました。呼び寄せ家族のことは国においては個人の問題として認識されているように感じました。当時頼ることが出来たのは家族や友人しかありませんでした。

——今の仕事と重なっている部分がありますよね。ところで、支援・相談員には希望してなられたんですか。

いいえ。新しい支援制度の開始当初は支援・相談員になりたい人がいない状況でした。裁判時の弁護団の方に声をかけられ、兵庫県の二世を勧誘しましたが、給与額も決まらず、交通費や通信費の負担も不透明で、引き受ける二世は殆どいませんでした。私も1年間勤めた後は以前の貿易関係の仕事に復帰しようと考えていました。

その頃、父の遺品を整理しましたが、部屋は裁判資料の紙で埋め尽くされていました。父は中国語の読み書きができたため、文字のわからない他の帰国者の分の資料も作成していました。生活が苦しい中、コピー機付のファックスを自宅に備え、大阪までの交通費を捻出し裁判を闘っていました。遺品を整理しながら父の苦労を実感しました。

私も支援・相談員になる以前から一世からの相談を日々受けるようになっていました。自分がやるしかないと思って支援・相談員の仕事に就きました。報酬もわからないま

まのスタートでした。しかし、今はこの仕事が出来てとても良かったと思っています。

——**帰国者の支援は、支援・相談員がきてどう変わったんでしょうか。**

「ことば（中国語）が通じる」点と、「帰国者の状況をより深く理解できる」点により、支援はとても充実してきました。帰国者の中には以前は内向きで外に出なかった人もいましたが、前向きに生きるように変わってきたと感じています。また、言葉や社会の仕組みが分からない不安、特に病院を受診したり介護サービスを利用する際の言葉の不安が軽減されたことで、安心して人間らしく生活できるようになった、という言葉をかけられます。私は帰国者達に「日本に帰国してよかった」と思ってもらえるように日々支援・相談員の仕事に取り組んでいます。

一方、私の日本でのこれまでの生活を振り返ると、帰国時に19歳であり、年齢的に一日でも早く働き始めて生活保護世帯から自立する必要に迫られて、帰国した翌年には働き始めました。日本の教育を受けていなくて、文化や習慣も身に付いていない上、初めての就職が先進国の日本でした。このような状況から選べる職業は限られました。子ども時代の夢は看護師になることでしたが、私が日本で受けられた職業訓練は、簿記、販売、パソコンでした。職業安定所で仕事を探している時に、日本語を話せないという理由で障害者雇用の窓口に案内されたこともありました。せめてどんな職業に就きたいかという希望を聞きとり、情報を提供してもらえるような支援があればどんなに良かったかと今は思います。帰国者が大切なターニングポイントを迎える時点で、日本の制度を理解し、経験豊富で、帰国者の事情が分かる支援・相談員の存在は必要

です。私が家族を支えなければならなかったとき、1人でも分かってくれる人がいたら、一緒に問題を考えてくれる人がいたら、近い年齢の人と相談ができれば、どんなに心強かったかと思います。

また、30～50代の年齢で帰国した二世の中には、中国での社会経験が日本で全く活かせなかった方も多く、日本での生活は大変厳しかったと思います。それに比べると私のように若い時に帰国した家族の苦労はまだまじだったと、今の年齢になって感じる様になりました。帰国時の年齢が高ければ高いほど日本での生活は辛かったのだと思います。今後、新たに日本に来る呼び寄せ家族がいれば、他の帰国者の体験談を聞いたり日本の制度を学ぶ機会が必要だと感じています。

——**予定の時間を大幅にオーバーしていますが、最後に座右の銘があれば、お願いします。**

座右の銘ですか。そうですね。「やればできる」です。苦労してる、大変だ、と言う前に行動してみる、ただ文句を言ってるだけじゃ問題は解決できないと思います。

——**なるほど。有馬さんのバイタリティと行動力にその信条は表れていますね。今日は長時間、ありがとうございました。**

有馬さんのお父さんにはお会いできませんでしたが、そのお父様の強さや優しさを久美子さんの中に見たような、そんな錯覚も覚えたインタビューの時間でした。謝謝。

注釈

※1 正式名は中国帰国者定着促進センター。中国帰国者が地域社会に定着し日本の生活に適応することを促進するために、帰国直後に基礎的

日本語や生活習慣などの集中研修を行う施設。
埼玉県所沢市に所在するため所沢センターと言われる。

※2 新支援策「改正中国残留邦人支援法」の中で支援・相談員制度が創設された。

※3 中国残留日本人孤児が日本の国の責任を追及するために起こした裁判。2002年12月の東京地裁提訴を皮切りに、全国15カ所で原告団を結成し闘った。2006年12月、神戸地裁判決で勝訴し、新たな支援策（2008年4月施行）ができることになった。

(奥 優伽子)

KFC 帰国者新長田交流会 2013年度 活動報告

※ 通常交流会：日本語学習 & 秧歌踊り（第1・3火曜日）／ 太極拳（第2・4火曜日）

※ 特別行事など

- 4月30日・5月7日 神戸まつりに向けて秧歌練習
- 5月19日 神戸まつり 秧歌踊りで舞台出演！
- 6月11日 遠足（広島）
- 7月13日 「グループホーム ハナ」一周年式典 秧歌踊りで出演
- 8月6日 「我愛你、中国」音楽会
- 9月28日 孫文記念館「月見の会」秧歌踊りで出演
- 10月15日 華道体験
- 11月4日 「カンタービレ」音楽会
- 11月5日 映画鑑賞会
- 11月24日 ふたば まちの文化祭 太極拳で舞台出演！ ／ 帰国者写真展
- 12月10日 太極拳講師へ感謝の式典 ベトナム人高齢者交流会
- 12月24日 料理交流会
- 1月14日 映画鑑賞会
- 2月4日 新春会
- 3月25日 遠足（コスモスの会）

編集後記

2号の通信ができあがりました。今回は帰国者の方々の記事もいただき、充実したものになりました。今年度は神戸まつりに秧歌踊りで参加したこと、2年半の練習の成果として太極拳演武の発表ができたことが二大イベントと数えられます。この発表の経験がどれほど帰国者の方々の自信と誇りになったのか、普段の姿も堂々としたものになったようです。改めて、人に認められるということは社会生活をおくるうえでとても大切なことだと思いました。

(奥 優伽子)

